

2007年9月28日

原爆症認定のあり方に関する検討会 御中

長崎・原告 森内 實

意見陳述書

私は長崎から参りました原告の森内実です。

私は8歳の時に爆心地から4、8キロ離れた長与村で被爆しました。自宅の近所の大きな柿の木が一番上に登って、空を見上げるようにして、セミを採っていた時に、突然太陽が爆発し、目がつぶれるのではないかと思うほどの光を浴びました。その日の夕方から大橋町に住んでいた叔母や叔父たちが6人逃げてきました。6人とも次々に全員死んでいきました。幼い二人の子供は火傷や外傷でしたが、他の4人はものすごく吐いたり、下痢をしながら放射能におかされて、亡くなったのです。

このような状況の中、私は母に連れられて、11日早朝、爆心地からわずか400メートル離れた、大橋町にあった父の実家に、家族を捜しに行きました。私は、唯、母についてまわるだけでしたが、喉の渇きとひもじさに、ごみだらけの井戸水をかきわけて何回も飲みました。母がイモをみつめてきて、家の残骸で焼いて食べました。

14日には、母の実家の安否がわからず、爆心地から800メートルの坂本町に行きました。それから半月くらいの間、4、5回行き来しました。食べ物はいつも、畑からとってきたイモと井戸水を飲んでいました。

私は、14、5日頃から吐き気をもよおすようになり、ひどい時には死ぬような苦しみにあいました。

私の家族は6人が被爆しました。そのうち4人がガンに侵されました。父が腎臓ガン・皮膚がん。上の姉は、脾臓ガン・乳がん・肝臓ガン。下の姉は、乳がんになりました。父と上の姉は、永く苦しんだ末に亡くなりました。

私もいつかは、父や姉達のような病気をするのではないかと、不安でしたが、その不安は的中して、いろんな病気にかかりました。C型肝炎、大腸ガン、白内障、進行性悪性胃ガンと3年毎にわずらったのです。今度はどこにガンができるのかと、不安で不安でたまりません。

現在、長崎で裁判している原告は38人です。そのうちすでに8人の方が亡くなっているのです。8月9日に一人、9月6日にも一人、次々に亡くなっていきます。生き残っている原告も、毎日、病気や不安とたたかいながら、死と向き合っているのです。

そして、あきらめて原爆症の申請をしないまま亡くなっていった被爆者も多くいます。

私たち被爆者には時間がありません。

原爆の被害と被爆者の実態にそった原爆症認定制度を一日も早くお願いします。